

福井県医師会

だより

第594号 平成22年(2010)12月



黎明

福井市 平野 治和

表紙写真説明：黎明

福井市 平野 治和

絵を見ることも好きで絵画展にも出かける。県内には、おそらく1000にもおよぶ人たちが絵筆を持ち膨大な絵の具が毎年消費されているのだろう。私の病院には、県内の画家の大きなサイズの絵画も数点掛けてある。付き合いのなかで画家の人となりに触れることもまた楽しい。11月末に初めてのヨーロッパに妻と二人で行くことになった。西洋の現代絵画が好きな私であるが、今はイタリアの中世絵画書を読んでいる。

醫 縫 録

がん死亡率減少に寄与する県医師会の力

福井赤十字病院長 野口 正 人
福井県がん委員会胃がん部会長



「がん」が日本人の死因の第1位になってから30年が経過しようとしている。2006年(平成18年)にがん対策基本法が成立、翌年4月から施行され、がん検診の受診率向上・がん死亡率を20%減らす運動が日本中で始まった。正確には、75歳未満のがん年齢調整死亡率を目標値まで減らそうという事である。国が策定した2007年度からの5カ年計画を基に、都道府県が地域推進計画を立てる構図である。福井県のがん死亡率は低く、全国の上位・第2～6位にランクされる優良県であるが、これを更に減少させるにはがん検診の受診率を上げねばならない。何故なら、福井県の中でがん検診受診率が低い地域では、進行がんが多いと言われるからである。

欧米のがん検診受診率が60～80%のレベルにある事をご存知の方は多いであろう。がん対策基本法の目標は受診率を50%まで上げることで、スタート時の2007年調査では日本の5つのがん(胃・大腸・肺・子宮・乳房)の受診率は20～33%である。福井県では市町や会社など職域にがん検診の受診を勧めているが、5つのがん受診率は15～37%(2008年)で、尚一層の努力や住民への広報が必要である。

私は福井県がん委員会胃がん部会の部会長を務めているが、胃がんに限定して見ると地域の集団検診と職域のがんを含む健康診査を併せても、受診率は2007年19%、2008年20%と50%にはほど遠い数値である。日本人に一番多い「胃がん」、男性では罹患率第1位のがんで、女性では乳がん、結腸/直腸がんを併せた大腸がんに次いで、罹患率第3位のがんである。福井県は5カ年計画の中で、今年度から新たな方策を講じた。がん検診における「個別検診」を増やそうという策である。胃がん検診では、地域の集団検診は市町が検診の自己負担額を無料にしない限り伸び悩むだろうこと、胃がん検診を請け負う(財)福井県健康管理協会の検

診車の台数から見ると、無料にしても集団検診の数は2倍にも増やせないことが明らかである。また、福井県の「個別検診」は他府県の個別検診受診率と比べると、全てのがんで賤ずかしい程、低い数値である。

がんの個別検診を担うのは、県医師会の多くを占める開業医の先生方である。従来、胃がん検診の間接フィルムを読影するのは、地域中核病院の勤務医と各郡市医師会の読影委員会の先生方であったが、郡市医師会の中には胃がん検診を担当する読影委員会がない所もあった。しかし、福井県が県医師会にがん個別検診の精度管理を委託したのを契機として、県下全域に読影委員会が形成された。大変喜ばしい事である。そして、今回このような形が整ったのは、胃がん検診において古くから医師会の先生方を牽引してきた、旧武生市・福井市・坂井郡医師会および福井県胃腸疾患懇話会の会員先生方の努力があったからと思うと、自然に頭が下がる。

今や「早期がんであれば、がんは治る」時代になった。個別検診の受診が増え、がん検診受診率が向上してがん死亡率が減少するかは、今後の県医師会の先生方と市町の努力に懸かっている。医師会の先生方が患者や地域の住民に対して呼びかける、等の支援なくしては、胃がんを含めたがん検診の受診率向上はありえないのである。先生方が個別検診に直接携わらなくても、かかりつけ医が「がん検診を受けましょう」「早期がんであれば、がんは9割近く治る(肺がんは別だが; 46%)」と呼びかけないと、もはや受診率50%の目標は達成されないであろう。そして、県医師会の先生方の声、運動が市町に対する圧力になるだろう。

今回は胃がん検診方法の賛否に関する話を紙面の都合で割愛した。